
東アジアの言語と表象



新しく目にした東西言語接触研究に関する資料

——2013年欧州訪書記——

内 田 慶 市

New materials of Studies on Linguistic Exchanges between East and West

— Visiting some libraries of Europe in 2013 —

UCHIDA Keiichi

The author had the opportunity of Kansai University overseas researching in Russia, Germany, Italy, and China from July 27 to September 30, 2013. I was able to see a lot of material in this period, I would like to introduce some of them for the convenience of the study on Linguistic exchanges between East and West.

筆者は、2013年7月27日から9月30日までの期間、関西大学在外研究員（学術調査）としてロシア、ドイツ、イタリア、中国の各国での資料収集の機会を得た。表紙絵の資料もその一つであるが、以下、今回の調査で新しく見た資料について以下少し述べて同学の研究の便に供したい。

キーワード：文化交渉、東西言語接触、サンクト・ペテルブルク、ローマ、欧文試料

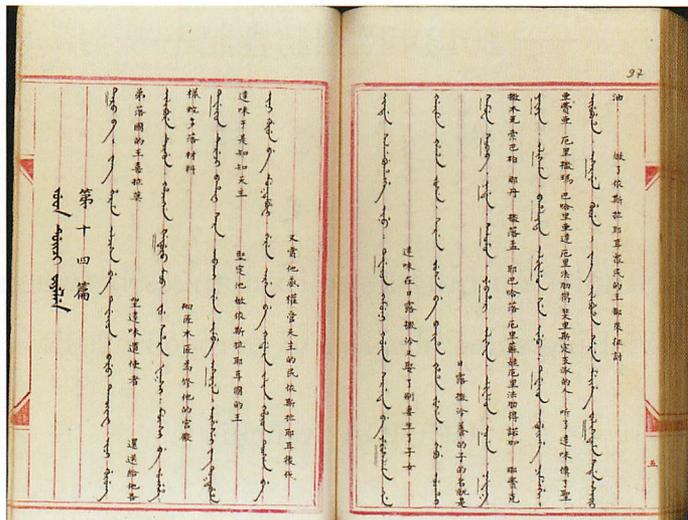
(1) サンクト・ペテルブルク・ロシア東方文献研究所

漢訳聖書の研究はこのところ新しい段階に入っている。

それは主に2つの「聖經」の発見によるものである。1つは、モリソンの『神天聖書』の元になったとされるジャン・バセ (Jean Basset) の漢訳新約聖書の発見。特に、ケンブリッジ大学図書館とローマ・カサナテンセ図書館での稿本はこれまでほとんど取り上げられることのなかったものである (内田慶市 2010、2011、2012参照)。もう1つは、それがかつて存在していたことは分かっていたが、ずっと誰の目にも触れてこなかった賀清泰 (Poirot) の手になる漢訳聖書『古新聖經』の発見である。それは上海徐家匯藏書楼に残されていたもので、その影印本も昨年度初めて出版された。

さて今回のサンクト・ペテルブルグでの一番の目的はこの賀清泰の『古新聖經』の満漢合璧版を見ることであった。

Volkovaの満州語関係マニユスクリプト文献目録 (*Opisanie man'chzhurskikh rukopisei Instituta narodov Azii AN SSSR, 1965*)などを参考にしてC. 11 (mms) という請求番号であることを確認して早速閲覧申請。現物を手にした時は思わず身震いした。これがかの「幻の漢訳聖書」の満漢版である。



これについては、金東昭2001（「东洋文库藏现存满文圣经稿本介绍」『满族研究』第4期）で以下のように説明されている。

Yudae gurun-I wang sai nonggime sosohon nomun bithe [Paralipomenon libripromi pars secunds constans]

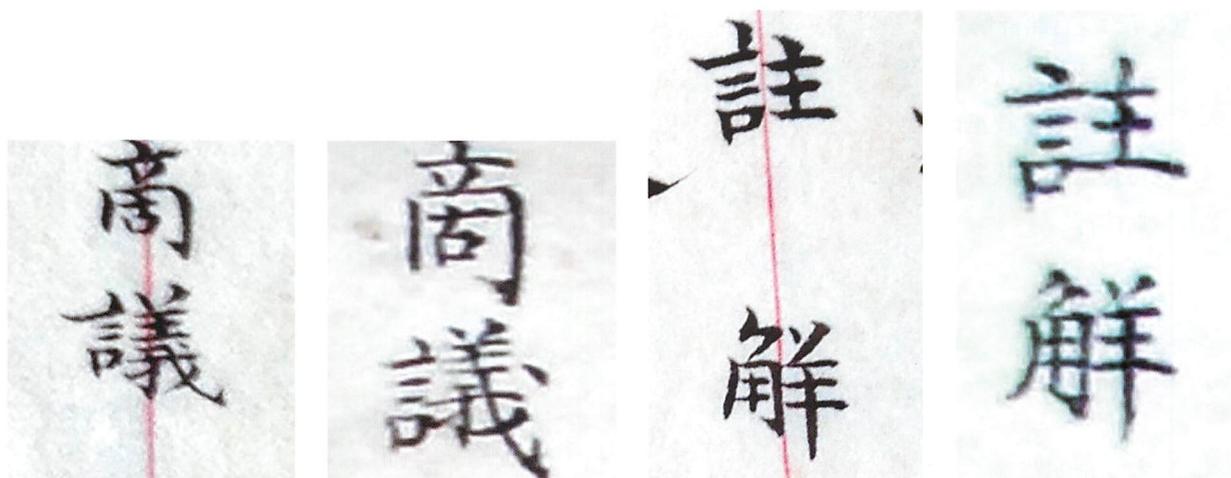
是Poirot神父翻译的满、汉文圣书原稿中的《历代经》部分。至于是出自Poirot神父亲笔，还是其它人的手笔，则无从考证。这本原稿一册为100+5张，各面（页）是8行，大小为34×23、25.5×8 cm。现收藏于苏联科学院亚细亚民族研究所。

しかしこの記述には問題がある。

実際には、大きさ（34×23.5＝紙型全体の大きさ、25.5×8＝罫線内の大きさ）はほぼこれでいいが、本文は全101葉（表紙と白紙の葉の計2枚は除く）、各半葉10行（満漢各5行）である。

金2001が何故「各葉（頁）8行」と言っているのかは分からないが、これはVolkova1965の記述に基づいているようであり、案外、金氏は現物を見ていないのかも知れない。

本稿本はいわゆる旧約聖書の「歴代誌上第13章（如達國眾王經尾增的總綱・卷壹下・第十三篇）」から「第29章（第二十九篇）」までが収められているが、その書体は以下に示すように、上海徐家匯藏書樓藏漢字本とほぼ同じ筆跡と思われる（左が満漢本、右が徐家匯本）。また語彙の異同もわずかに見られるが、漢字本の方がより正確である。



また、こうした合璧版の場合、たとえば『清文指要』等の満漢合璧版では、先に満州語があり、中国語はその訳という形が一般的と考えら、従って中国語にはどこか「翻訳臭」があるのであるが、この『古新聖經』の場合には、そういった「翻訳臭」が感じられず、先に中国語があつて、それに対応する満州語が付けられたという可能性が高いように思われるが今後の課題としておきたい。

なお、本図書館には他に満州語版『古新聖經』も各種所蔵されている。

この他に取り上げておくべきものとして、以下のようなものがある。

C. 60. 『神經撮節』（Printed at Serampore by the English Missionarys.）

全七葉、聖書解説本。

C. 221. 『樂善堂書目』

上海樂善堂主人謹啓

重刊樂善堂發兌書目叙光緒十三年丁亥二月 上海樂善堂書局謹識

叙 甲申仲春 滬北 樂善堂書房主人述

凡例（1-3）丁亥仲春，乙酉初夏

樂善堂發兌銅板石印書籍地圖畫譜上卷（1-44）

樂善堂發兌書籍目錄下卷（1-33）

樂善堂藏板書目（1-11）

上海樂善堂藥房發售各種妙藥目錄（1-5）

D. 654. 『華英通用雜話上卷』付『聖經史記』（耶穌降世壹千捌百肆拾陸年，江蘇省松江府上海縣墨海書館藏板）

ロバート・トームのもの。

D. 624. 『舊遺詔書 摩西五經 創始轉 出麥西國傳 利未書 戶口冊記 復傳律例書』

耶穌降世一千八百四十六年，大清道光二十六年 寧波華花聖經書房刊

いわゆる分合活字の使われたもの。トームの『正音撮要』と同じ

C. 723 『官語詳解』

雍正7年秋新鐫

袁一州先生較正南北音

句句避俗常談旁音下註廣語

堂梓行

敘蔡鑑題

黎鳳翹敬書

例言

目錄

本文全26葉

これについては、かつて高田時雄氏が「清代官話の資料について」（『東方学会創立五十周年記念東方学論集』1997）で触れられたことがあるが、現物は余り見られない貴重なものである。



C.116. 『官音便覽』

同治甲子春重刊、漳浦張錫捷先生著 味根齋藏板

序

較正官音仕途必需雅俗便覽目錄

卷首：時俗語類、笑談便話

凡例言（0.5）

人面圖，背面圖等（乾坤葉）

卷上 口頭套語から（24葉）

卷中 天地山水——（25葉）

卷下 百家姓音註，千字文音註（14葉）

これは法政大学沖繩文化研究所にも所蔵されているが、稀覯本に属す。

E.513 『英話註解』

C.130 上海商務印書館有限公司編訳印行『中西各種書籍』1906

C.137 上海美華書館『中西教科書目録』1908

C.311 『上海四馬路商務印書館書目第1輯』

C.131-133 『商務印書館出版書提要』1906, 1908, 1909

C.326 『孩童故事』1883

E.611/6, 12, 13 『小孩月報』1878, Vol. 1. No. 2, 4

（2）ドイツ・Wolfenbüttel図書館

ドイツでは今回は特にWolfenbüttel Herzog August Bibliothekでの調査を行った。この図書館は1572年にDuke Juliusによって収集されたコレクションを元に作られたドイツでも最も古い図書館の一つであり、数学者・哲学者のライプニッツもかつて館長を務めていた（1690-1716）ことがあり、彼の集めた中国書コレクションもある。ゲストハウスも完備していて、1日15ユーロ程度と極めて安い。小さな街だが、木組みの家が建ち並び実に風情がある。なお、フェローシップ制度も充実していて、Doctoralで1ヶ月1000ユーロ、Post-doctoralで1250ユーロが支給され、また宿舎も提供される。期間はどちらも2ヶ月以上9ヶ月まで。興味のある方は是非申請されてみることをお勧めする。

さて、係の人に調べてもらった当館所蔵の中国関係のマニュスクリプトの請求番号は以下のものである。

148. Blank, 148. Blank. I, 148. Blank.II, 148. Blank. IV, 148. Blank. Va,

148. Blank.Vb, 148. Blanc. VI

62. 2. Extrav.

91. 2. Extrav.

115. 1. Extrav.

117. a. EXtrav.

117. 1. Extrav. (1)-(11)

118. 1. Extrav, 118. 1. Extrav.III

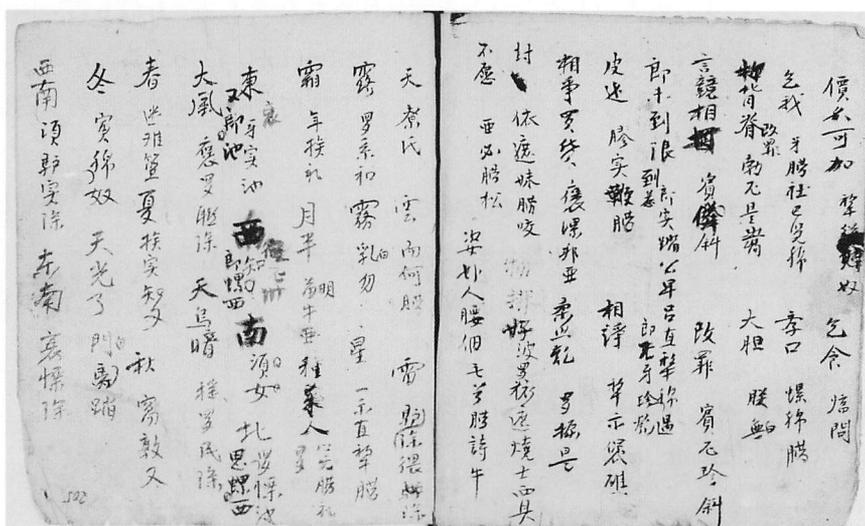
130. 4. Extrav. (1)-(3)

量的には多くはないが、中には面白いものが含まれている。特に、91. 2. Extrav.の中には、14種のマ

ニュスクリプトが入っているが、そのうち (12) は、かつて北京外国語大学の楊慧玲氏が『或問』第17号(「德国图书馆中文藏书述要」2009)でその存在を明らかにした「佛郎机化人話簿」、つまり漢葡対訳語彙表(ポルトガル語は漢字で表記される)であるが、実は、その後の(13)(14)も同じく漢葡対訳語彙集であり、しかも量は(12)よりも多く、単語だけでなく、長いポルトガル語の文章も漢字で表されている。

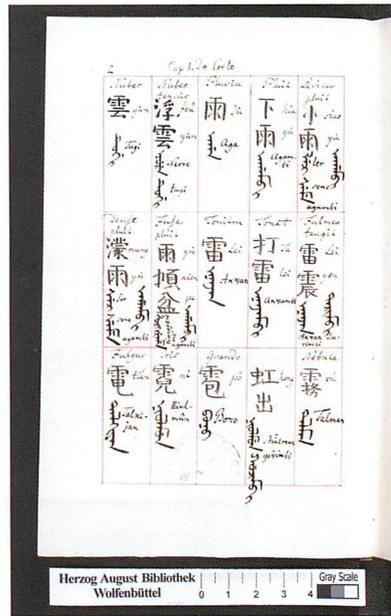


(楊2009で紹介されたもの)

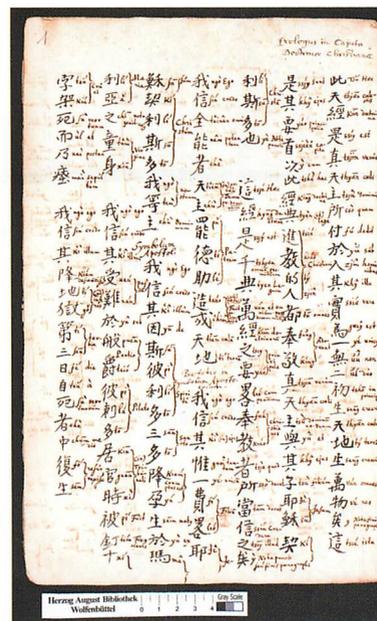


(今回新たに発見した漢葡対訳語彙表)

この類いのものとして他に、ラテン語—漢語対訳語彙集(148. Blank. VI)もある。これは漢語だけでなく満州語での注釈もあり、清代のものであるが、クラブロート(Julius Klaproth)のものとしてされている。



以上の他には、『天主実義』や『聖教日課』などが、すでに前述の楊2009で触れられておりここでは割愛するが、楊で示されていないものに117. a. Extrav. 「Christliches gebetbuch (天主要理)」がある。



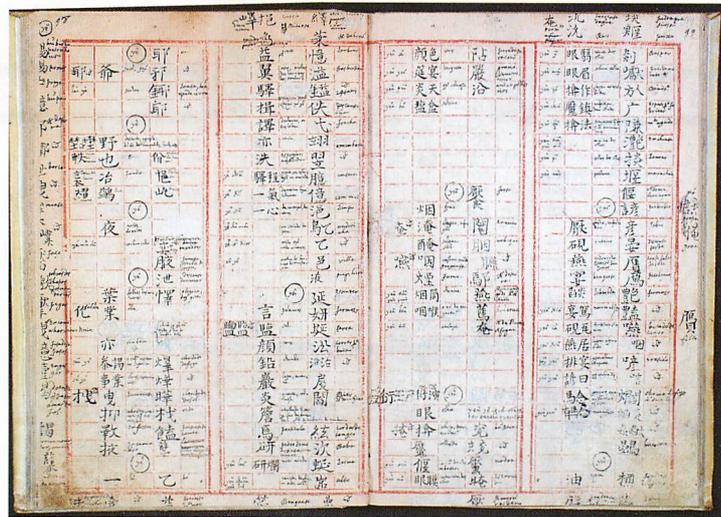
「漢字+音註+ラテン語訳付き」のものであるが、入声表記が見られないことから清代のものと考えられる。文白混交体で書かれていて、文体資料としても面白い資料である。

(3) ローマ国立図書館

ここでは相変わらずマニスクリプト目録からこれまで未見のものを中心に見ていった。特にここで取り上げておきたいのは次のものである。

Ori. 173. 『Dizionario cinese portoghese (漢葡字典)』

これは恐らくはFrancisco Diazの手になるものと思われ、これまでほとんど言及されていないものである。

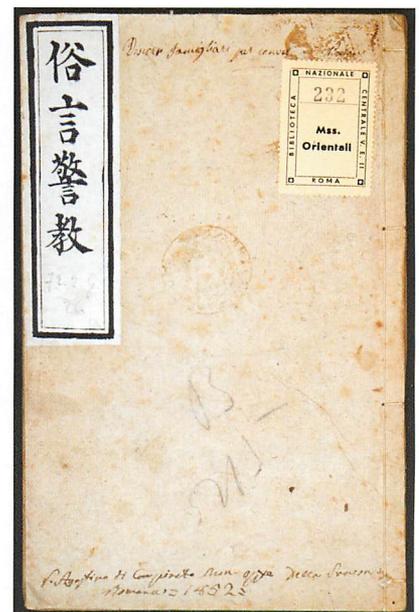


Ori. 174の『Dizionario cinese-inglese (漢英字典)』も興味深い資料である。

Ori. 206は1840年代の南京地区における中国人キリスト教信者名簿であり、中国名、キリシタン名、職業等が細かく音註も付けて記録されている。

Ori.232『俗言警教』(1852?)は全50葉で、孔孟や老荘といった中国古代思想更には仏教などを引きながらキリスト教の論理を説くもので、文体は文白混交体。

この他、手書きの中国語学習ノート類も数多く残されていて、まだまだ見るべきモノがここにはあると感じている。



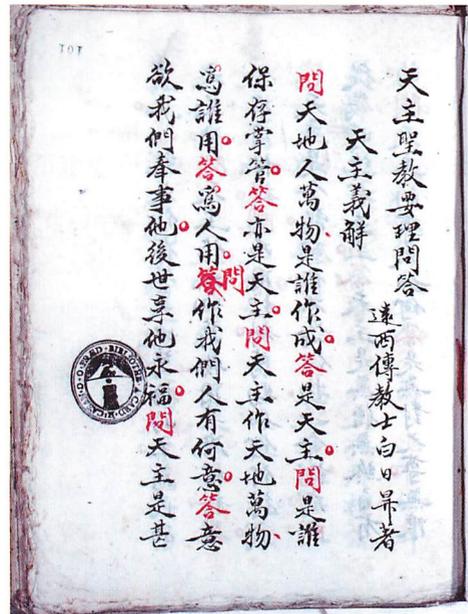
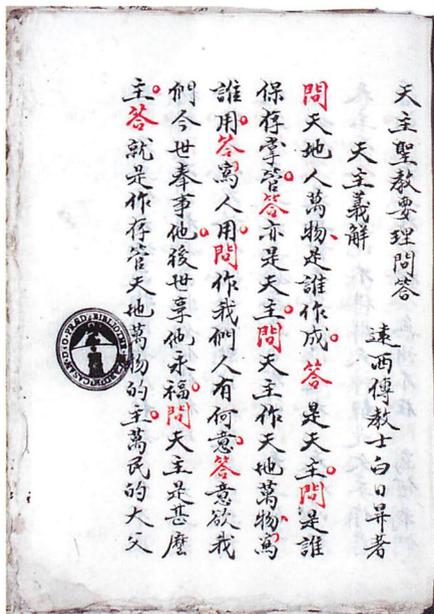
（4）ローマ・カサナテンセ図書館

この図書館は毎年夏には必ず訪れるところ。係員もさすがによく顔を覚えていてくれて何かと便宜を図ってくれる。

この図書館の漢籍についてはMenegon2000 (The Biblioteca Casanatense (Rome) and Its China Materials, 『中西文化交流史雑誌』) があって非常に便利であるが、実はこれは完璧ではなくて、現在、ライブラリアンのDr.Isabellaがローマ大学サピエンツァのマシーニ教授の教え子のDavor Antonucciをアシスタントとしてより完全な目録を作成中である。

今回もとりあえずはMenegon2000を手がかりにいくつか資料を調査したが、以前にも見ていたMS2273と2236、2256について述べておく。

MS2273にはバセ（白日昇、Juan Basset）の『天主聖教要理問答』が2種収められている。この図書館には、モリソンが元にしたバセ訳漢訳聖書が所蔵されているが、それ以外に、この『天主聖教要理問答』があったのだ。

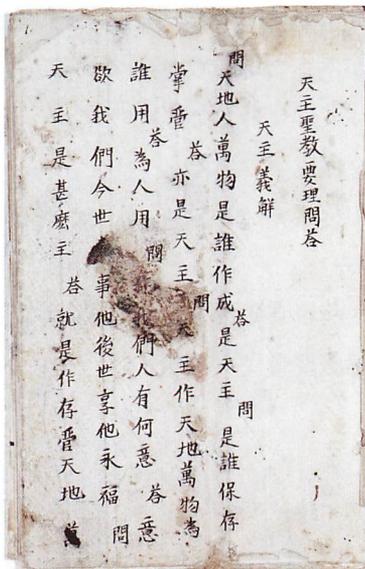


かつて筆者はバセ訳に2種類あり、カサネテンセ本と大英図書館本の違いは福音書の部分が、前者は普通の聖書の形を取っているに対して、後者はシャッフルバージョンになっていて、それは後者がバセが編纂出版したことのあると記録がある「聖教要理」の類いのものでないかという仮説を立てたことがあるが、それは誤りであることが今回の発見で明らかにされた。バセはこうした聖教要理を実際に作っていたことになる。ただ、カサナテンセ本聖書とこの要理本の字体はよく似てはいるが恐らく別の人の手になるものと思われる。

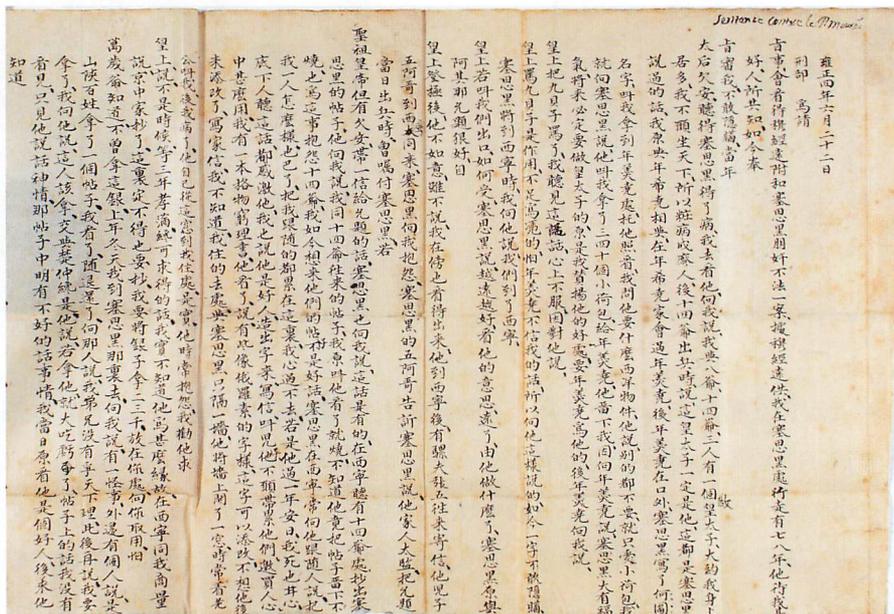
この他、MS2273で面白いのは、「百家姓帖」「三字経」などの音註付きのものである。こうした音註付きのものは、ローマ国立図書館にも多く所蔵されているし、ナポリの国立図書館やナポリ東洋学校にも

残されているが、それぞれの時代の音を反映しており、音韻研究には有効な資料となろう。

『聖教要理問答』はMS2256にも含まれているが、先の2種とは明らかに筆跡が異なっていて、時代は少し下るものと思われる。



また、このMA2566には下のような雍正帝の恐怖政治に関連する人物（塞思黒）に関わる文書なども含まれている（同様の文書はMS2273にも入っている）。



MS2236には、Premareの漢拉対照の「心字深義」が含まれている。

ところで、カサナテンセでは、これまでずっと気になっていたことがあり、それを解明すべくかなり

の時間を費やしたが結局解決には至らなかった。それはこういうことである。

カサナテンセ版バセ訳漢訳聖書は確かにこの図書館に存在する。そしてこれに関する論考も筆者は以前に公にしている（『モリソンが元にした漢訳聖書—新しく発見されたジャン・バセ訳新約聖書稿本』『アジア文化交流研究』2010）。

このバセ訳稿本の一つがローマの図書館にあることは以下のように、19世紀末にすでに指摘されていた。

The end of the Ming dynasty, and the beginning of the present Ta Ch' ing, were the palmy days of Jesuit missions in China. At that time portions at least of the Scriptures were translated into Chinese and printed for general use. It is not improbable, indeed, that the whole of the Scriptures were translated, though they were never printed, and therefore never got into general circulation. A manuscript copy of the New Testament in seven volumes, now preserved in the library of the Propaganda at Rome, may belong to this period. We could not expect Rome to give her people freely whole Bibles, not even New Testament; but much of the substance of the Gospels, and sketches of the more interesting historical narratives of the Old Testament, were made at different times by different men, and neatly printed and widely circulated. Copies of these, some yellow with age, some later reprints, may still be found in the possession of old Catholic families in Peking. They are written in a simple though not uniform style, much of which differs little from the Kuan-hua of the present day. (Rev. John Wherry 1890, 47p)

（明末清初は中国においてイエズス会が栄えた時代であるが、この時期に聖書の一部は中国語に訳されて、一般の用途のために印刷もされた。もちろん、実際には、あるいは聖書の全てが翻訳されていたのかも知れないが、しかし、それ（聖書の全て）は決して印刷されることはなく、一般的に流布することはなかった。ただ、今、7巻の新約の手稿本がローマの外国宣教師図書館に残されているが、恐らくこれはこの時期のものである。）

実はこの記述は恐らくはRemusat1811（*Sur les traductions de le Bible, Mélanges Asiatiques*）が元になっていると思われる。レミュザは、そこで「ローマのCongrégation de Propaganda fideの図書館に所蔵されている7巻本はバセによって中国語に訳された新約の一部である」と述べているのだ。

では、カサナテンセとCongrégation de Propaganda fideとの関係はどうなるかである。

カサナテンセ図書館の稿本はその表紙に「Fattineli神父の寄贈によるもの」と記されている。Menegon2000によれば、カサナテンセにFattineli神父によって最初に中国関係の書物が寄贈されたのは1733年の9月12日、2回目が1741年であり、多くのマニュスクリプト（51巻）が収められたとある。つまり、このバセの稿本は1733年、あるいは遅くとも1741年にはカサナテンセ図書館に所蔵されていたということになる。

となると、レミュザの見たものはこのカサナテンセ本なのか。すなわち、Congrégation de Propaganda fide図書館とはカサナテンセ図書館を指しているということなのかである。しかし、この二つは別物で

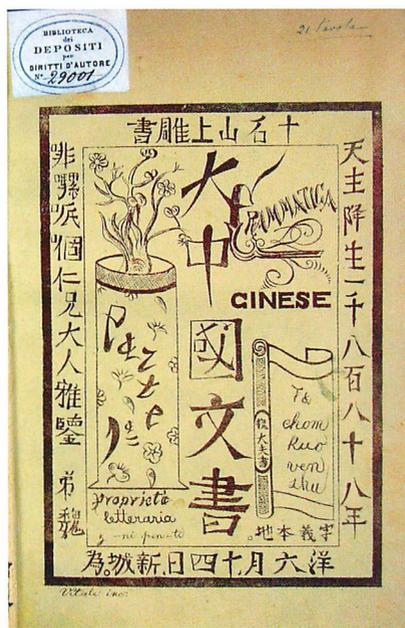
あり、Congrégation de Propaganda fide図書館は今もローマ市内に存在している。

疑問はこういうことである。そこでまずはカサナテンセ本が確かにFattineliによって寄贈されたものであるかを確認するために、図書館に残されている寄贈書リストを丹念に読んでいった。なにせ、当時のラテン語の手書きによる記録だから骨が折れる。2日間かけて見たが結局見つからず、最後にはDr. Isabellaに助けを借りたがそれでもだめだった。多分、間違いなく1733年あるいは1741年にFattineliによって寄贈されたものであるはずだが、では、レミュザの記述はどうなるのかである。ひょっとしたら、もう1冊バセ訳稿本はCongrégation de Propaganda fide図書館に眠っている可能性もあるのだが、今後の調査を待つしかない。

(5) 「ナポリ中華書院」関係の書籍

ナポリ中華書院（現在のナポリ東洋大学）は、イエズス会宣教師マテオ・リッパによって1732年に創設された欧州最古の東洋学の教育機関であるが、そこで発行された以下のような中国語に関する書籍は、当時の中国語の実態を知る上でも貴重な資料となる。これらの資料は、ローマ国立図書館を始め、ナポリ国立図書館、ナポリ東洋大学に多く収められている。こうした資料について詳細な研究はこれまでほとんどなく、今後の進展が望まれるところである。

- *De lingua sinica gramatica* (ナポリ国立図書館, Ms. I. G. 54)
VaroやMartiniとの関連があると考えられている文法書。
- *Zhongguo zi 中國字. Gramatica chinese fatta per uso della scuola speciale istallata nel Collegio de' Chinesi in Napoli* (1813, ナポリ国立図書館, Ms. I. G. 55)
Terraという人物による中国語文法書。
- *Dictionarium sinicum-latinum* (ナポリ国立図書館, Ms. I. G. 58)
中国語ラテン語対訳字書だが、字書というよりは単漢字表に近いもの。
- *Vocaboli usuali e domestici con frasi semplici e dialoghi facili e brevi* (實用日常詞彙與簡短對話, 1874, ナポリ国立図書館)
品詞論も含む、基礎会話集。
- 『初學簡徑 Grammatica Linguae Sinensis』(1835, ローマ国立図書館)
Varoの官話文典のナポリ版。
- 『大中國文書 (Grammatica Cinese)』(Vitale, 1888, ローマ国立図書館)
刊本。会話、文法書。
- 『華學進境』(1869, 1872, ローマ国立図書館、ナポリ東洋大学)
中華書院の中国語テキスト。三字経から始まり、古文まで。



以上挙げたもの以外にも多くの貴重な資料を目にすることができたが、今後折に触れて取り上げていくつもりである。

最後に、2ヶ月の貴重な機会を与えてくれた関西大学と色々な便宜を図っていただいたロシア科学アカデミー東方文献研究所所長ポポア教授、フランクフルト大学のアメロン教授、ローマ大学副学長マシニ教授に心から感謝の意を表しておきたい。

(参考文献)

内田慶市2010「モリソンが元にした漢訳聖書—新しく発見されたジャン・バセ訳新約聖書稿本」『アジア文化交流研究』第5号
 _____ 2011「再論马礼逊《神天圣书》的成书过程」『印刷出版与知识环流——十六世纪以后的东亚』出版博物館等編，上海人民出版社
 _____ 2012「白日升漢譯聖經攷」『東アジア文化交渉研究』第5号